

滋賀在住の福島武司と申します。世の中には同姓同名の方が数名居られまして、私はディーブハウスと打込みジャズを愛するトラックメイカーとして生きて一人です。私はいわゆる回避性人格障害を持っており、生を受けてから現在に至るまでの45年間、ずっと対人関係で苦悩を感じて生活していますが、大好きな音楽のこことなれば一途に突き進むことが出来ます。私にとっての音楽はまさに人生を救う唯一の存在となっています。近年の素晴らしい音源を挙げていけば一冊の本が出来てしまう程のボリュームになってしまいうので、私が音楽を購入し始めた時期から多大な影響を受けたお気に入り作品をご紹介します。

#### 1. Pal Joey's New Breed / Section Of Life / 1995

まず、これだけは別格としてご紹介しておきたい。パルジョーイフリークは勿論、彼を知らない方でもすんなり入り込める内容のディーブハウスアルバムとなっており、これさえ好きになればもう既にパルジョーイフリークと名乗って頂いて差し支えありません。フルートやサクソ、ギター等の生楽器が洗練されたビートの上で快適にアドリブを繰り出す曲の構成で、時間や場所を問わずいつでも気持ちが良いなれます。以前、私はこのディスクを車内のチェンジャーに入れたまま、その車を売却してしまっていたことがありますが、もう1枚持っていたので胸を撫で下ろしました。

#### 2. Herbie Hancock / Dis Is Da Drum / 1994

ハービーハンコックの作品は、ほとんどすべて愛聴していますが、何度も何度も繰り返して聴き込んだ思い入れが強いアルバムです。当時の流行でもあったブレイクビーツサンブルがリズムの主体となっており、キーボードプレイがどの曲にも高密度にちりばめられていて、どこを聴いても数秒でハービーの曲だと解ります。後にも先にもこれ程までに完成度が高いアルバムは無いのではないかと思います。

#### 3. Bob James / Obsession / 1986

国内リリースの際に帯のキャッチコピーとして「アートオブノイズがフュージョンを演奏したらこうなる」的なことが書かれていて興味を持ったのがきっかけとなりボブジェームスの虜となりました。1曲目のタイトル曲と最後の7曲目の曲は当時高校生だった自分にはとても真似の出来る領域ではないハーモニーとリズムを含むすべての楽音をFM音源のみで創り上げたという意欲作で、登下校中はウォークマンですと聴いていました。確かキーボード雑誌によれば使用したシーケンサはボブの友人が独自に開発したIBMマシン上のプログラムだとか。

#### 4. Art Of Noise / Into Battle With The Art Of Noise / 1984

アートオブノイズ。この12インチ盤に初めて針を落とした瞬間の圧倒的な音の快楽感覚は体験した者にしか理解し難く、言葉で説明出来るような簡単なものではないでしょう。本気でオトナに成ったらフェアライトCMIを購入するぞと思い込んでいたのですが、誰が当時いまだきのPCオリエンテッドな音楽制作環境を想像していたのでしょうか。

#### 5. Der Plan / Japlan / 1984

勿論ドイツにはクラフトワークやアインシュツルツェンデノイバウテンといった商業的に大成功を収めたアーティストが色々居て、どれからも影響を受けたわけですが、国内盤で比較的容易に購入することが出来たアタックレーベルの作品群はアートワークも含めて実に「いらない」気持ちにさせてくれるポップな作品で、どんどんコレクションしていきました。ジャブランは国内独自企画のアルバムで、Gummitwist / Space Bob / Hey Baby Hop / Glitzergleiter と名曲が揃っている。機材の発達とは無縁の、いやむしろ当時の機材だからこそその質感が今でも映えていると思います。

皆さん、最近どんな風に音楽を摂取していますか？ collectiveに遊びに来てくださる音好きであっても、昨今のネット環境の発達によって、これまでに比べて音楽を購入する機会が減っているのではないのでしょうか。かくいう僕も、CDの購入量はずいぶん減り、基本的にレコードとapple musicという対照的な媒体で音楽に親しんでいます。自分の場合、1960年代～1980年代の旧譜は基本的に中古盤レコードを買う習性があるのですが、近年リリースされたものの多くは、apple musicで間に合わせるものが多くなっています。

そのなかにあつて、numero(アメリカ)、light in the attic(アメリカ)、honest jon's(イギリス)、jazzman(イギリス)などのレーベルから出た編集盤は独自の美学に基づくこだわりが見られ、新作であってもレコードで所有したいと思わせる訴求力をもっています。ただし、上に挙げたレーベル群はジャズやソウルを基調にしながらも様々なジャンルの音楽に手を広げており、実際の愛聴盤は全体のごく一部にとどまります。

一方、リリース量は多くないのですが、大半が僕の耳を捕らえて離さないレーベルもあります。それがオランダはアムステルダムの新興レーベル、music from memoryです。20～30年前に細々と活動していたアンビエント / ニューエイジ系のミュージシャンの知られざる音源を編集し、現代に聴くべき音楽として提示する手腕は卓抜しています。

取り上げられたミュージシャンは、ごく一部のコア層に支持されているものの、実際は無名に近い存在。それでも聴いてみたい、手にとってみたいと思わせるのは、すべての作品に貫かれた秀逸なアートワークの功績が大。ドイツの老舗ジャズレーベルのECMがそうであったように。

オススメはカタログ1番のLeon Lowman / Liquid Diamonds (2013)、カタログ2番のGigi Masin / Talk To The Sea (2014)、カタログ9番のSuso Saiz / Odisea (2016)。レーベル名のとおり、忘れていた記憶を呼び覚ましてくれるような深く静かな作品たちです。今回、行商して下さっている汎芽舎さんでも取り扱っているレーベルなので、一度是非、丁寧に作られたアナログ盤を手にとっていただければと思います。

<http://musicfrommemory.bigcartel.com>

## information

今回のゲストは1990年代から極上のハウスミュージックを制作されているtakechaことTakeshi Fukushimaさん。彼の流麗なライブ(20:25～21:25)は必見です。神戸元町のレコード屋「汎芽舎」さんの行商も楽しんでください。takechaのレコードも扱っています。collectiveオリジナルT-Shirtsも1500円で販売しています。4サイズ2カラー展開。数量限定につき必要な方はお早めにお買い求めください。

次回コレクティブは今夏の開催を予定しています。詳細はブログでご確認下さい。

<http://blog-collective.blogspot.jp/>

## 松i aka kengomatusuiからのお知らせ “kengomatsui”

僕は2015年までジャズミュージシャンの菊地成孔さんの私塾「ペンギン音楽大学／大学院」でバークリーメソッドに基づくコード理論とモダンポリリズムについて習っていたのですが、2015年に卒業という制度が初めて設けられ(それまでは生徒が「もう来なくていいや」と思ったらやめる方式だったそうです)、初の卒業生の一人になりました。最後に生徒たちが卒業制作を作ったのですが、そのクオリティが高かったため、菊地先生がSONYの中に持っているレーベル「TABOO」から配信リリースが決まったというのが事の経緯です。

僕は今回「松i」名義で2曲、名前は出ない形で1曲、合計3曲に参加しました。「松i」名義で参加した2曲のうち1曲はトラック、もう1曲はラップです。この名義も菊地先生に適当につけていただきました。

トラックの方は卒業制作なのでリズムに関するトライをしており、1拍を5等分したノリ(5連符)を散らせると3等分(3連符)に似たものになる、というリズムの性質プラス、J Dillaスタイルの手入力のリアルタイム打ち込みでもたついたリズムを作り、コンピュータで補正(クオンタイズ)しないままループさせる手法を用いています。このかなりもたついた粘りのあるリズム感でミニマルダブ風のトラックに仕上げました。グリッチも多用しています。

ラップは人生初めてのチャレンジでしたが、トラックがとても良くできたクールなものだったので、これなら何をやっても様になるのではないかとやってみたらそのまま採用になってしまったものです(笑)。もちろんリックも自分で書いています。作詞もしたことがなかったのでリックの作成が一番苦労しました。レコーディングの時に菊地先生の指示で2回ラップを録音して音を重ねることになりました。今聴き直すと、初めてのラップ・レコーディング経験で肩に力が入っていたかなと思いますが、何度も聴いているとなかなか良くて、心が疲れた時に(笑)度々聴き返します。ラップはこれからもやっていきたくなりました。

音源はSONYのスタジオでマスタリングされており、例えばJUJUさんや奥田民生さん同様の(笑)メジャークオリティの高音質に仕上がっています。たくさん売れたらアナログが切られることになるので是非ご購入いただけますと幸いです。僕のトラック以外も、7拍子のヒップホップとか、M-BASE(ジャズミュージシャンのスティーブ・コールマン氏によって提唱された、複数拍子の並列によるリズムの回り込みスタイル)のトラック、1拍5等分によるリズムのビートものなど、テクニカルとクオリティの揃った音源が多数収録されており、「ブラックミュージックのグルーブ」に関心のある方には特におすすめです。

このアルバムの特集で先日TBSラジオの「菊地成孔の粋な夜電波」という番組に出演してきました。おしゃべりだけでなく、トラックも放送していただきました。本来、放送は東京と沖縄だけなのですが、Youtubeにアップされたものがありますので、よろしければ聞いてみて笑ってやってください。

<https://www.youtube.com/watch?v=8hVbvoM4QFA>

## 備忘録 夢の街跡 第7回 枚方を歩く “楠田行展”

枚方といえば、「ひらかたパーク」。V6の岡田君がひらパー園長を務めることでお馴染みの遊園地がある都市ですね。皆さんはそんな枚方に、近世から戦後までの約360年間、大人の遊園地があったことをご存知でしょうか。

枚方は、徳川幕府成立以前から京と大坂を結ぶ京街道の宿場町として、また淀川舟運における物品の集散地として栄えた町で、家康は慶長6(1601)年、岡新町村・岡村・三矢村・泥町村の4カ村を枚方宿と定めしました(「枚方宿の今昔」)。宿は、現在の京阪枚方市駅から京都方面に徒歩10分のところに位置する新町地区(旧岡新町村)にある東見附を出入り口とし、そこから西1・5km歩いた堤町(旧泥町村)の西見附までが範囲。旅館は江戸時代に60～70軒ありました。当時は旅人の膳を世話する飯盛女(めしもりおんな)と呼ばれた女性が、夜の相手をしたことが常識的な時代。同著によれば、幕府は享保3(1718)年、旅館1軒につき2人まで飯盛女を置いてOKという触れを出しており、120～140人以上の飯盛女がいたようです。町並みには宿場情緒をかすかに残しています。

「枚方市史」によれば、枚方宿は明治5(1872)年、貸座敷免許地の指定を受けていました。貸座敷とは遊廓のこと。明治12(1879)年には39軒の遊廓があり、87人の娼妓(遊女)がいました。しかし遊廓は、民家とともに立ち並んでいたようで風紀上問題がありました。そこで、明治42(1909)年、泥町村より更に西の一面に遊廓を移転し、桜新地として開きました。開業時、20軒で娼妓は33人、芸妓(芸者)は20人でしたが、大正7(1918)年には35軒、娼妓51人、芸妓70人に発展。「全国遊廓案内」が発行された昭和5(1930)年当時、35軒で娼妓は約110人いました。たくさん桜が植えられたことから桜新地と称したことです。戦後の赤線案内書「全国女性街ガイド」(昭和30年発行)によると36軒の特殊飲食店に108人の接客婦がいた桜新地ですが、当地も他の赤線の例にもれず昭和33(1958)年の売春防止法の施行とともに消滅しました。昭和40年代初期には芸妓の街として再興を図り、40人弱いた芸妓が温習会(芸事の発表会)に300人の客を集めるなど意地を見せましたが、枚方市駅付近の繁華街に客足を奪われ、昭和50年代には芸妓もいなくなりました(「枚方市史」)。

桜新地は今、桜町と地名を変えて新興住宅地になっており、赤線跡もほとんどありません。木造建築はほんの少し残っていますが、洋風のカフェ調の建物は全滅しました。桜新地を散歩するのは2度目で、最初に訪れた2010年があった検番跡も消えていました。せせらぎに立つ桜が散らす花びらに何とも言えない寂しさを感じた2度目の探訪。近い将来、当時を知るのは新地の由来になった桜だけになるかもしれませんね。

### 主な参考資料・文献

「赤線跡を歩く」木村聡／自由国民社  
「全国女性街ガイド」渡辺寛／季節風書店  
「全国遊廓案内」日本遊覧社  
「枚方市史 第四巻」枚方市  
「枚方市史 第五巻」枚方市  
「枚方宿の今昔」宿場町枚方を考える会

### 検番跡はもうない



## House Bar MUSE “yu”

collectiveをやっている雲州堂から徒歩圏内に「もうあかん、やめます！ 店じまい」なる看板を掲げながら毎日営業していた西天満交差点のイロモンスポットの存在の靴屋オットーをご存じだろうか？ 残念ながら先日ついにそのお店も本当の店じまいを迎えてしまったと聞き、なんとなく街の景色がまた一つ変わっていくのかと、自分とまったく関わりがないながらも、少し寂しい気持ちになったものだ。そのオットーのある同じに通りにあるHouse Bar MUSEというバーとの最近のお付き合いについて書こうと思う。

大阪はよくキタとミナミを二分してその地域性や文化などが語られがちだが、この店はキタとミナミに位置しながらも、梅田周辺を中心の雑踏から外れた環境に立地しており、自宅からも徒歩で行ける場所なので、通い詰めるのに時間はかからなかった。きっかけは京都でいつもナイスパーティーを繰り広げているOUTER SPACEからNOBUさん、HAYASEさん、SECO君が一挙三人ともrhythm reflectionというイベントにゲストに呼ばれ、プレイする知らせを聞いて足を運んだ日だった。ミナミ中心に出入りしていた自分にとっては、近所にこんな開放的な空間があり、多くの「初めまして」の音楽好きが集まっていることに新鮮な驚きを感じたものであった。

Museのマスターの横地さんとは、この日挨拶しただけだったが、知らない人ばかりの空間にもかかわらず、居心地の悪さはなかった。みんな肩の力を抜いて楽しんでいるし、知らない人が気軽に声をかけてくれたりもした。パーティー中もお店がbarとして機能している感じが重要だと思い始めていた頃だったので、出合いのタイミングも良かったのかもしれない。平日も通常のバー営業をしていると聞いて、飲んだ帰りや残業帰りに寄ることが多くなるにつれ顔見知りも増え、マスターとは一気に仲良くなっていた。1月にはバーズデーパーティーでDJブースに立たせてもらい、3月のニューパーティーの立ち上げに向けてますます深いお付き合いになってきていた。

その矢先の2月末にマスターが緊急搬送で病院のICUにいと聞いたのは、rhythm reflectionの終わりごろの朝にMuseに駆け付けたタイミングだった。後日、意識不明の状況を目の当たりにして言葉を失ったが、マスターの同居人でMuseではDJとして活躍するYukkoさんは気丈にカウンターに立ち続け、平日のパーティムの灯りは消えず、多くの常連が通い詰めた。希望を持ち続ける祈りが通じたのか、奇跡の回復がfacebookに更新されていった。意識が戻った、呼吸器が外れた、一般病棟に移ってリハビリをバリバリやっている…

そしてなんとこの原稿がお客さんの目に触れる4月23日に退院！ 予定だそう。前回のcollectiveに遊びに来てくれたマスターは、子供たちと仲良く遊んでいた姿が印象的だった。今日もちらっと顔を見せてくれたらとも思うが、まだまだ療養が必要かと思うし、日常にゆっくり戻ってきてもらえたらいいかと思う。まだまだ楽しみはこれからだ。

最近の雑感。ビッグクラブの相次ぐ閉店、シーン、パーティーの蛸壺化を見ていて、暗澹たる気持ちになることも多々あるが、こういう状況だからこそキタとミナミをつなぐことが重要なんじゃないかと考えるようになった。この思いに至るヒントをMuseからもらった。実行していくのもMuseやこのcollectiveというパーティーになろうかと思う。もっともっと混じり合って交流していこう。この件についてはもう少し書きたいがこの辺で。

### House Bar MUSE

大阪市北区西天満6-2-14 マッセ梅田ビルII本館 地下1階  
<http://barmuse.blog10.fc2.com>  
[https://twitter.com/bar\\_muse](https://twitter.com/bar_muse)